

# 緑のまきば

1970. No 5

小金井緑町教会  
 小 金 井 緑 町 教 会  
 小金井市緑町四一六―三三  
 電話 〇四二三一八一―七九六一  
 編集 牧師 山本圭一

## 説教

### 福音の宣教

―マルコ福音書16章14―20―

山本圭一

マルコによる福音書十六章では主イエスは甦えられて後、マグダラのマリヤに、次に二人の男に、そして十一弟子たちに現れ給うた。ここに端的に示された教会の姿がある。主の復活は単独者と同時に交わりの中に表わされた。

しかも復活の信仰者たらしめるのみでなく、復活の証人として彼らを歴史の激流の中に押し出した。わたしたちは、何か根本的な思い違いを犯していないだろうか。信仰とは朽ちる人間の口先のことでない。或いは人間の宗教的体験に情熱をブラスして生きることでもない。宗教の人間がまことしやかに生きること、かえって現代人は顔をしかめ、彼らに躓くばかりか真理からも遠ざかってしまっている。―イエスは十一弟子が食卓についているところに現れ―給うた。食卓／人はそこに坐る時、他人のうちで自分をつくらうかたくなさから解放される。共に食卓にあず

かる喜びが自己を革新する。そればかりではない。イスカリオテのユダの恐ろしい反逆の傷が、不具のような集団の欠けとして残る中へ、主は来り給うた。

しかも一体、主はこの群れの中に何を見たのだろうか。「彼らの不信仰と、心のかたくなこと」主は責められた。この主の痛みを通りすごしているならば、何と大きい思い違いを犯していることだろう。主の責めは主イエスの真情であった。これに触れないキリスト者は偽り者だ。

教会の礼拝において、主の責めが、単独者と公同の群れに切り結ぶところでは、主の霊はこの群れの中に生きられる。「お責めにあった。」この事件のなかから、教会は生き始める。

しかし、不思議なことにこれが終りではなかった。まだ、その事柄が全く未解決であるにかゝらわず、主はこの群れに委託を与えら

れた。「全世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えよ。」責められ、そこで問われていた。問いは、主のもとに答えられていた。復活の光のもとに、十字架は罪の赦しであった。まだ何もなし得ない不信仰なかたくな群れの中に、罪の赦しのさわやかな風は吹き抜けていた。

―いざ、生きやめよ！―彼らはそこで後を振り返る必要なく、前へ進み始めた。「この全世界へ」の視点は、マルコ六章七の十二弟子の国内伝道の拡大である。この方法・領域の拡大を支えたものこそ初代教会の「福音を宣べ伝える」ことであり、復活の主と共に主の命令に服従し、復活の中核として成立した終末的状况のもとの奉仕であった。

III 会堂は完成した。しかし、何と深い淵にわれわれは立っていることであろう。このところをわれわれのものとしようとすると、どこから、教会すら瓦礫したではないか。主は、来られる。義なる審判者としてでなく、われらの父なる神は、罪を赦す父として、十字架の言葉とみ霊とにおいて来り給う。だから、われわれは美しい朝の息吹きを味わい知っている限り、もはや、それ以外の夜の暗さのうちに引き込まれることはあり得ないのである。